

「二十七日月を待つ」

新月の日をはさんで、三日月形の月が2回見られます。新月からおよそ3日後に見えるのが三日月(みかづき)、新月からおよそ3日前が二十七日月(にじゅうしちにちづき)です。いずれも見かけの位置が太陽に近いので、真夜中には見えません。三日月は夕方の西の空に見えて、太陽を追いかけるように沈んでいきます。帰宅の時間帯なので、三日月は目にする機会が多いでしょう。その三日月も、太陽を追いかけるように日没後3~4時間で沈んでしまいます。

二十七日月は、何もかも三日月と逆です。事実「逆三日月」とか「逆さ三日月」なんていう呼ばれ方もします。二十七日月は、明け方の東の空に見えます。太陽よりも数時間早く昇って来ますが、日の出とともに太陽に追いかけられるように消えてしまいます。実際は「消えた」わけではありません。月面を平面と仮定すると、二十七日月は、満月の5~6%しか光っている面積がないので、太陽光に勝てないのです。光っている場所も三日月とは逆です。太陽のある側が光っていることは同じなのですが、三日月は右下、二十七日月は左下が光っています。ウサギのお尻側が光っていることになります。



「二十七日月」 三日月とは逆に、月の左下が光っています。一番端の部分が「途切れ途切れ」に写っているのは、月の表面の凹凸(地形)によるものです。よく見ると、暗い部分(地球照)に、うっすらとウサギが浮かんでいるのがわかります。(埼玉県比企郡小川町で撮影)

三日月は夕方の月なので、観察しようと身構えなくても、一ヵ月に1回（時には2回）目にします。6年生の教科書にも、三日月の観察のことが載っています。しかし、二十七日月は、生来一度も見たことがない、という方も多いと思います。観察するには、相当な覚悟が必要となります。何しろ昇ってくるのが午前3時前後、朝とともに消えてしまうからです。「よっしゃー！来いっ！」と、前夜からジャッキ（気合）を入れておかないと、見逃す確率100%です。

三日月が「見上げたら、見えていた。」という感じなのに対し、二十七日月は「待って待って、やっと見えた。」という月です。私は、この二十七日月を「待つ」のがとても好きです。街のビルの間、山の稜線、真っ暗な森の木々の間から昇ってくる二十七日月は、オーロラと同じくらい美しいと思います。しかし二十七日月の観察は、決して宿題にはしません。その日の授業で居眠りをする子が必ず現れるからです。



「森かげから昇る二十七日月」

初秋とはいえ、この朝は気温8℃・・・毛布をひっかぶって、森の中で月を待ちました。美しく神秘的な光景でした。三日月と同じように、二十七日月も地球照を伴っています。このあと数時間で、太陽光に負けて、青空に溶け込んで消えてしまうのです。（北軽井沢で撮影）

（お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋）